さかまた

2008.12

NO.72

シャチ「ラビー」の10年 −3世誕生までの道のり−

▲妊娠8ヶ月の「ラビー」　大好きなトレーナーと

当館では、これまでに母親「ステラ」と父親「ビンゴ」の間に4頭のシャチの赤ちゃんが誕生し、このうちの3頭が元気に育っています。日本で初めて生まれた長女の「ラビー」が2008年10月13日にオスの赤ちゃんを出産し、日本で初めての3世の誕生となりました。そこで、ラビーの10年をふり返りながら出産までの道のりをご紹介しましょう。

■日本初のシャチの赤ちゃん「ラビー」誕生

「ラビー」は、1998年1月11日に誕生しました。母親「ステラ」は初めての出産で育児になれていなかったためか、赤ちゃんに寄りそい面倒を見るまでに15時間、授乳をさせるまでに54時間もかかりました。私たちは、心配しながら見守っていましたが、やっと授乳することができ、赤ちゃんの太りを確認したときは、ホッと胸をなでおろしたものでした。その後は順調に成長し色々なことを学んでいき、生後2週間後には母親のマネをして、ジャンプをしたり、鳴いたり、舌を出したりと元気に遊ぶようになり、4ヶ月後の1998年5月にはエサを少しずつ食べるようになりました。生まれた時から一緒に生活をしているトレーナーとは大の仲良しで、少しずつトレーニングを行うと、色々な種目を覚えていきました。覚え始めの種目は、トレーニングの時間以外でも自らくり返し行い、まるで、自主的に練習をしているかのように見えたものです。特にトレーナーと一緒に水中で行う種目が大好きで、1歳半となった1999年7月20日にパフォーマンスデビューを果たしました。

そんな元気な「ラビー」に事件が起こりました。2歳になったばかりの2000年3月、サブプールで元気に泳いでいるときに勢いあまってキーパー通路に飛び出てしまったのです。子どもといっても体重は740kg、人力では戻せないので、クレーンを手配しタンカに乗せてプールに戻しました。開館中だったので、お客様も心配し、まわりをあわてさせた大事件でしたが、幸いにけがもなく、何事もなかったかのように、すぐに「ステラ」と泳ぎ始めました。

▲元気あまって、キーパー通路へとび出した「ラビー」(2歳)

■「ラビー」が大人に

メスのシャチは、7〜8歳で大人になるといわれています。「ラビー」も9歳になった2007年4月、「オスカー」との間に交尾行動があり、血液検査により妊娠していることが確認されました。妊娠2ヶ月の頃にはエコー検査で胎児を確認することができ、赤ちゃんができたことを実感しました。子どもだとばかり思っていた「ラビー」がお母さんになるのです。妊娠初期には食欲が安定しないことも多く、自分でも体調の変化にとまどっているような感じさえありました。元気のない時もあり心配しましたが、妊娠6ヶ月を過ぎた頃から体調も落ち着いて食欲も強くなっていき、9ヶ月目になるとお腹のふくらみが少しめだつようになりました。妊娠16ヶ月になると、ますますお腹がめだつようになり、出産直前の18ヶ月目に入ると胎動も見られ、お腹の赤ちゃんは無事に成長していることが分かりました。

▲エコー検査で映し出された2ヶ月齢の胎児

■ついに出産！

10月になっても出産のめだった兆候はみられませんでした。しかし、10月12日に水面に浮いて体を丸めたり反らしたり、プールの底にお腹をつけてじっとするなど、陣痛と思われる行動が多くなりました。また、徐々に下降した体温は、34.5℃と通常よりも1℃低くなり、出産が間近にせまっていることが分かりました。10月13日午前8：35に破水を確認し出産が始まりました。いよいよ赤ちゃんが生まれてくるのです。午前8：55には赤ちゃんの尾ビレが見え、これまで経験をしていない、開館時間中の出産になることが予測され、あわただしく決められた手順に沿って準備が始まりました。出産はパフォーマンスが行われるメインプールで、「オスカー」と妹の「ララ」がいる中で行われます。パフォーマンスは中止され、出産が始まったことが園内にアナウンスされると、貴重な一瞬を見ようとお客様がぞくぞくとスタンドに集まり始めました。

▲がんばれ!「ラビー」もう少しだ!

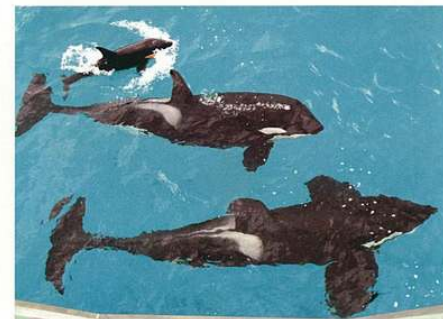
私たち、シャチのトレーナーは、万が一の事故に備えプール周辺の決められた位置で待機しているので、水中の様子はよくわかりません。一方、客席側のガラス面をラビーが通過し、赤ちゃんの尾ビレが見えるとお客様からどよめきが起こります。水面を見つめながら、ラビーが妊娠してからの18ヶ月間に起こった様々なできごとが頭をよぎり、元気な赤ちゃんが生まれてきて欲しいという願いだけで心がいっぱいになりました。そして午前11：44、客席から今までとはちがった歓声と拍手がわき起こりました。水面が大きくゆらぎ、赤ちゃんが生まれたことが分かりました。すぐにプールを囲んだトレーナーたちが赤ちゃんの場所を確認し、手をあげて声を出します。「ここにいます。」「呼吸しました。」「ステージに向かっています。」赤ちゃんがこちらに向かってきます。「確認しました。右に向かいます。」大声で伝えました。最初は一人で泳いでいた赤ちゃんですが、数分のうちに「ラビー」が寄りそい、「ララ」も加わって、赤ちゃんをサポートしながら泳ぎ始めました。

出産に際して「ステラ」での経験から様々なアクシデントを想定してきましたが、初産にもかかわらず「ラビー」は、私たちの心配をよそに、母親としての役割を何の迷いもなくやりとげてくれたのです。

▲手をあげて親子の位置を知らせる

■元気に育て！

出産から25時間後には授乳も確認され、日々順調に育つ「赤ちゃん」。シャチは、母親を中心とした家族で生活し、群れの年長者から色々な行動を学ぶといわれています。「ラビー」は妹たちの誕生を経験し、「ステラ」の育児を間近で見て学んでいたのでしょうか。日本で初めて生まれ育った「ラビー」は、いつの間にか、たくましい母親になるまでに成長していたのです。

今回の出産は、多くのお客様に見守られ、その喜びを共有することができました。これからも「赤ちゃん」の成長と鴨川シーワールドの『シャチファミリー』を温かく見守ってください。

▲生後13日目の赤ちゃんと母親「ラビー」・父親「オスカー」

（二宮　奈美枝）

ベルーガ「ナック」が話した！？

▲研究の協力者「ナック」

『イルカは言葉を覚えることができるか？』東海大学の村山教授と当館との共同研究が、注目を集めています。

「ナック」は、1988年にカナダから鴨川シーワールドにやって来たオスのベルーガで、村山教授との出会いは、18年前にさかのぼります。以来、「ナック」を対象にして、様々な認知能力に関する実験を行い、イルカ類の知的特性について調べてきました。5年前からは、「言葉」に関する研究を行い、この間に「ナック」は、フィン(足ヒレ)、バケツ、マスク(水中メガネ)の3つの物をそれぞれ違った音で鳴き分けることを覚え、さらに、録音したそれらの音を聞いて、それぞれに対応する物を選ぶ事を理解しました。

▲実験のポスターを前に　村山教授

私たち人間は、物の呼び名を覚え、その名を聞けば物を識別できます。例えばフィンを見れば「フィン」と声に発することができ、「フィン」と聞けばそれを選ぶことができます。「ナック」も同じように物と呼び名の結びつきを理解し、物に対応する言葉を発することができるようになったといえるのです。

あたえられた課題を、時には自信たっぷりに、時には悩み考えて答える「ナック」の姿は、どこか私たちと似たものを感じます。研究が進み、イルカと会話するための手がかりを見つけることができ、「ナック」が世界で初めて人と会話ができるイルカになることを願っています。

▲物を見て鳴き分ける実験

▲音を聞き分けて物を選ぶ実験　よーく考えて！

（藤井　有希）

夏休み体験学習を開催

▲「無限の海」でのペットボトルを使った水圧実験(サマースクール)

当館では、毎年夏休み期間中に体験学習を開催していますが、今年は、恒例の「サマースクール」に加え、「ジュニアトレーナー」と「ジュニア魚類飼育係」を開催しました。

今年で36回目となる「サマースクール」は、8日間の開催期間中に380名の小学生が参加しました。セイウチへの給餌、ペンギンやベルーガなどとのふれあい体験のほか、イルカやシャチを1頭ずつ見分ける水族館でのホエールウォッチング、水深6mの「無限の海」水そうにペットボトルを沈める水圧実験など、少し高度な内容にも挑戦し、自然環境と水の生き物のくらしについて学びました。

▲ペンギンとのふれあい体験（サマースクール）

「ジュニアトレーナー」は、2日間開催し12名の小・中学生が参加しました。イルカの飼育やトレーニングについてのレクチャーの後、エサづくりやプール掃除、サインを出してイルカを動かしたり、イルカの背ビレにつかまって一緒に泳いだりなどのトレーナー体験に子どもたちは大興奮でした。

33名の小・中学生が参加した「ジュニア魚類飼育係」は、近隣の磯での生物採集や、給餌や水そう掃除の体験、夜の水族館探検とトロピカルアイランド「無限の海」前での宿泊体験、鴨川漁港の見学と鴨川市漁協の職員の方とのQ&Aなどもりだくさんの内容でした。

どのコースも普段は体験できないものばかりで、参加した子どもたちにとって思い出深い貴重な経験となりました。

▲イルカの背ビレにつかまって一緒に泳ぐ(ジュニアトレーナー)

▲水そう掃除体験(ジュニア魚類飼育係)

（中坪　俊之）

モラモラ

ハナゴンドウを保護

6月20日、東条海岸で座礁していたハナゴンドウを保護しました。この個体は体長287cm、体重205kgのオスの成獣で、ヤセが進行し大変衰弱していました。口からは太くて長い釣り糸が出ており、釣り針を飲みこみ、エサを食べられずにいたものと思われました。長さ4cmもの大きな釣り針は、口の中にささっていたため、幸いに取りのぞくことができ、「イルカの海」に搬入し治療を開始しました。水深を調整しながら、係員が付きそいリハビリを続けたところ、徐々に泳ぎも安定しエサも自力で食べるようになりました。現在では、ホッケやスルメイカを1日に15kgほど食べていますが、体重の伸びも少なく、血液検査上も改善されないため、治療を続けています。（細野　透）

沖縄の魚たちが仲間入り

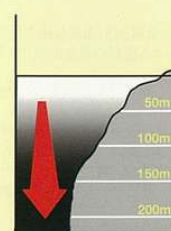
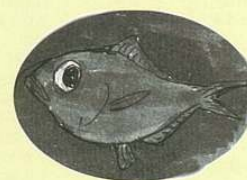
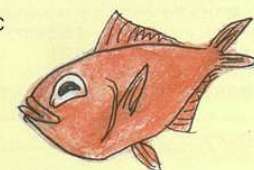
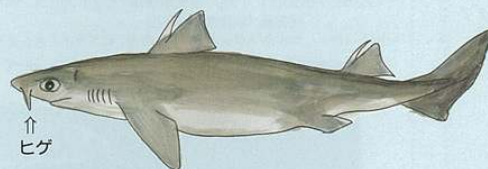
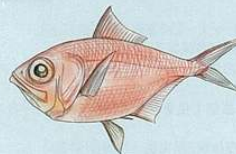
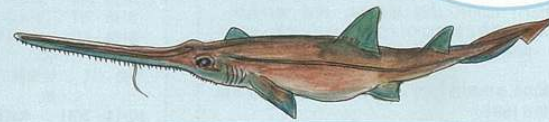
トロピカルアイランドにたくさんの熱帯性海水魚が仲間入りしました。今年の夏、沖縄美ら海水族館が監修した沖縄の魚たちを紹介するイベントが東京で開催され、当館が技術協力をしたことがきっかけとなり、イベント終了後に寄贈されたものです。成長すると2m以上にもなり、沖縄でも生息数が少ないタマカイ、沖縄美ら海水族館生まれで、日本では飼育例が少ないオオテンジクザメ、体長1.8mの巨大なドクウツボなどのめずらしい魚をはじめ、色あざやかなスズメダイやキンチャクダイの仲間など40種350尾の魚たちがやって来ました。トロピカルアイランドの各プールは、新たに仲間入りした美ら海の魚たちで一段とボリュームアップされ、お客様の注目を集めています。（大澤　彰久）

エトピリカのヒナが誕生

8月9日に当館で初めてエトピリカのヒナがふ化しました。ふ化直後のヒナは、全身黒い羽毛でおおわれ、体重は60gたらずでした。親鳥がエサを与える姿がほとんど見られず、体重も減っていたので、ふ化後2日目から1日3回ヒナを巣から取り出しての給餌を始めました。食欲は旺盛で体重も日に日に増加し、ふ化後50日目には羽もぬけかわりました。55日目の10月3日には、体重は600gをこえ、初めて泳ぐ姿が確認されました。成鳥と同じように翼を広げて水中を飛ぶように泳ぐ力強い姿を見て、ホッとひと安心しました。飼育を開始してから、9年めで初めて誕生したヒナを、大切に見守っていきたいと思います。（小貫 和生子）

世界水族館会議に参加

4年に1度のオリンピック・イヤーに開催される世界水族館会議が10月19日から24日にかけて、中国の上海市にある上海国際会議場で開催されました。今回で第7回となるこの会議は、「環境保全に対する水族館の役割」をテーマに、45ヶ国から600名をこえる水族館関係者が集まり、飼育や展示、教育活動や研究、環境保全や保護活動などに関する発表と情報交換が行われました。当館からは2名が参加し、2001年より実施しているアカウミガメの卵の保護活動や幼体の放流および教育活動についての発表をしました。ウミガメ類への関心は高く、各国で保護活動がさかんに行われており、発表後は多くの関係者と情報交換をすることができました。（小川　泰史）

親子でStudy
な・ぜ・な・ぜ・相・談・室

Q 深海ってどんなところ？

Q シーワールドで見られる深海の生物たち

表紙説明　出産翌日の赤ちゃんシャチと「ラビー」・「ララ」